WEP
ウエップ俳句通信
VOL.86

俳句通信

特別作品25句●今瀬剛一「命新し」

特集●突撃する〈ナニコレ俳句〉の旗手

失笑を買ふ　岸本尚毅 ―― ナニコレの深さ　奥坂まや
私の行動原理　筑紫磐井 ―― ナニコレ句集・「我が時代」　大井恒行
「なんじゃこれ」　坊城俊樹 ―― 密なる蜜なる　宮崎斗士

【特別寄稿】
「俳句言語にとって美とはなにか
――俳句の表出論の試み――（その３）」
西池冬扇

【石井　保100句】
「病中孤楽」

【精鋭３人競詠30句】
根橋宏次「解纜」
鈴木五鈴「五月来ぬ」
柳生正名「内と中」

【鑑賞会】
山崎千枝子第３句集
「森の扉」を読む
下鉢清子・市川榮次・
山崎千枝子

●好評エッセイ●

先人に学ぶ俳句「飯田蛇笏（六）――句集『雪芝』（二）」岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景――龍太の出発」井上康明
川崎展宏の文業「花鳥諷詠と『俳』（『俳句初心』）」須原和男
虚子散文の世界へ「死生観の確立」本井　英
地味で変な虚子句　五句集を読む「実景か実感か」阪西敦子
関本牌の俳句「雲の棒――『母系』」小川美知子
戦後俳句の戦略
「秋桜子・波郷・登四郎・洒子――新人顕彰システム」筑紫磐井

●作品●

棚山波朗・鈴木貞雄・徳田千鶴子・小川軽舟・
大木さつき・脇村禎徳・小河洋二・
鳥津余史衣・杉浦恵子・橋本榮治・伊藤伊那男・
福本弘明・谷佳紀・長田群青　ほか

書斎にて

古賀雪江

生ま身なる吾に集へり滝の冷え　津田清子

滝

群馬・長野の県境にある地蔵峠。そこから県道94号を北に進み鹿沢温泉をすぎたあたりに「たまだれの滝」はある。

県道脇の駐車場から吊橋を渡り、沢沿いに少し歩くと滝が見える。「たまだれ」とは玉飾りのある簾のことであるが、落差は5mとごく小さい。歩くことほんの数分の滝道の脇には木賊が生え、岩々は苔に覆われている。サンショウウオも生息しているらしい。

隣町の軽井沢にある「白糸の滝」は規模が大きくいつも観光客で賑わっているが、ここの滝ではたまにハイカーなどに会うぐらいである。その静寂さが好ましい。特に、この滝には桟敷山から染み出た水が流れており、この水の源泉が嬬恋村の水道になっているということを知ってから余計好きになったのかも知れない。

絵・文　松本善一

蝸牛と少女のあはひ密とせり

岸田稚魚

少女（おとめ）

旅先で宿をとった主人公と、そこで見染めた清純な少女とをめぐる物語「名張少女」は、明治の作家田山花袋の小説である。その再版本の序文には「名張は万葉集にも詠まれてある地丈けあって古雅な町である」とあり、小説の中でも「京都言葉は少し軽佻なところがあってあまり好ましいと思わぬが、この地方のは少し高尚なところが加わって言うに言われぬ味がある」と名張言葉について述べている。さて近頃はどうであろう、「こないだなあ、駅前まで行って来てんけどなあ」と語尾に「なあ」の付く会話をよく耳にする。「な」と一拍でなく二拍に発音する「なあ」が特徴的だが、この一語をもって高尚というわけにはいかないであろう。花袋も序文をつぎのように結んでいる。「古雅であった名張の言葉も、自然に変わって行くであろうが、憧れを持つ名張に対してこの序を書く」

絵・文　柏木とよ太

特別作品25句

命新し

今瀬剛一

もの思ひゐしがヨットの数増ゆる

青葉木菟いきなり面を打たれけり

夏痩せて女頂点より声す

鯉の色おぼろに沈みまた沈む

植田から青田へ筑波よりの風

過去はもう勿忘草の彼方なり

特集

突撃する〈ナニコレ俳句〉の旗手

加藤楸邨の〈ふくろふに真紅の手毬つかれをり〉を見た飯田龍太が「ナニコレ」と驚き、その句を評価した話は有名です。これまでも〝ナニコレ俳句〟はあったはずですが、近ごろ〝ナニコレ俳句〟の目立つ作家が何人かいます。今回は3人の作家に登場していただき、〝ナニコレ〟といわれて評判の悪かった句、あるいは評判のよかった句などについて、いくつか具体的に語っていただき、〈わが俳句の現在〉について語っていただくことにしました。さらに〈それぞれの作家の俳句をどう読んでいるか〉について、それぞれ3人の方にお書きいただきました。

超結社句会／新12番勝負

前列右から　永方氏、鳥居氏、林氏
後列右から　星野氏、細見氏、藤本氏

ゲスト　鳥居三朗・永方裕子
　　林いづみ・細見道子
ホスト　星野高士・藤本美和子

編集長　超結社句会の第27回目です。ゲストは「雲」主宰の鳥居三朗さん、「椰」主宰の永方裕子さん、「風土」同人の林いづみさん、「隗」主宰の細見道子さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さん。遠慮のない意見交換をお願い致します。

高士　4点句が4つあります。まず、

あをぞらへあをく飛んだるみちをしへ　　道三裕高

裕子　「みちをしへ」という虫は魅力的なんですけど、「あをく飛んだる」と言ったのはいままで聞いたことがないのと、「みちをしへ」は〝あを〟ではないんですが、読んでいると、なんとなく、飛んでいるという感じがするので、気分がいいなと思って頂きました。

道子　「あをぞら」「あをく」「みちをしへ」という旧かな遣いはすばらしいなと思いました。俳句は見た目も重要なエレメントなんだなって。リズムがあって、いかにも上昇志向の句だなと思いました。

三朗　飛ぶ前の「みちをしへ」をよく見るんですけど、そうなんだなと思いながら頂きました。